



ダイジーの花言葉
あなたと同じ思いです



手をつなごう

熊本地震から得られた8つの知恵



発行 関西大学社会安全学部 近藤誠司研究室
熊本市 手をつなぐ育成会

このパンフレットは、日本自然災害学会「緊急災害調査補助」の成果にもとづき作成されました。

熊本地震から得られた8つの知恵

1 ぜったいに必要！ 水と薬

いちばん困ったのは「飲み水」が手に入らないこと！これが最も多い声でした。給水所に行っても、こどもと並んでいる余裕がなかったのであきらめて帰った人もいます。しかし逆に、家庭で水を備蓄していたので、近所に配った人もいました。

次に困ったのは「薬」です。なるべく予備を持っておきたいものです。家の中、通所バッグ、保護者のかばん、そして車などに「分散管理」して助かったという人もいました。

【ローリングストック法】

まず、ペットボトルの水を箱買いして、1本使ったら、1本買い足す。あとはこの繰り返しで、常に家には1箱ぶんの水が備蓄された状態になります。保存食も同じ手法で気軽に備蓄していきましょう。

2 “とっておき”の備蓄もしよう

【キャンプ用品をチェック！】

被災地の中で、キャンプ用品が活躍していました。カセットコンロ、ランタン、テントや寝袋。さらには、使い捨ての携帯トイレなど。普段づかいできると安心です。レジャーも兼ねて、いちど休日に、みんなで使ってみませんか。

こどもに偏食やアレルギーがあるならば、子供に合わせた“とっておき”非常食を考えてみましょう。こども用のお菓子も大事です。のど飴やガムをリュックに詰めておくこともお勧めです。

灯かりがとれるもの、暖がとれるもの、これらがあれば気持ちが落ち着きます。今回、救援物資のなかで特に喜ばれたものに、DVDプレーヤーがありました。こどもの気持ちがほぐれる“とっておき”の備蓄を、親子でいっしょに考えてみませんか。

3 情報は“命綱”です

被災地は、状況が時々刻々変わります。全体状況は、テレビやラジオ、新聞から、地元の最新情報は、口コミ、FacebookやLINEグループで入手していた人が多かったことがわかりました。

余震が続き、天候も不順となると、親子ともども不安にかられます。デマに惑わされたという人も多くいました。複数の情報源でチェックした人、家族・友人・知人にチェックしてもらった人もいます。“情報過疎”に陥らない工夫が必要です。

【世代をつなぐ対策を】

60代を超えると、SNSやメールをしない人が多いようです。災害時には 育成会の事務所に「情報ボランティア」を招き、世代をつなぐ「連絡窓口」を開設することを考えてみましょう！

4 安全な空間を増やす

【地震防災の第一歩】

わが家が崩れてしまうと、命の危険に直結します。やはり、家の耐震化は重要です。熊本地震を経験した多くの皆さんが、「家具の固定を！」と訴えています。さあ、取り組みましょう。

住まいの環境が大きく変化すると、親子ともども、しんどい暮らしを続けなければならなくなります。家の中に入れなくなると、避難所に行くか、庭で暮らすか、車中泊か、厳しい選択を迫られます。

指定避難所はおろか、福祉避難所でも過ごせないと判断した人も数多くいました。車中泊ができるかどうかは季節次第です。まずは、安全な空間を確保する取り組みに力を入れるべきです。ご年配のかたが家具固定する場合には、お力添えをお願いします。

5 じょうずに^{エス・オー・エス}SOS 親も子も

まわりが落ち着いてくると、障害児・者の家庭だけが取り残されたように感じられてしんどいという声が寄せられました。このギャップに、社会はなかなか気づいてくれません。

がまんがまんを重ねると、やがてたおれてしまいます。被災地では「親のほうに先にダウンしてしまった」という声も数多くありました。じょうずに「SOS」を発信することで、自分がつぶれてしまう前に手をさしのべてもらいましょう。それこそが、こどものためになる一歩だと思うのです。

【勇気をもって、お互いに】

「何かお困りですか」という問いに対して、「わたしよりもっとしんどい人があるから大丈夫」と口を閉ざす人もいます。でも、勇気をもってお互いに状況を伝え合ってみましょう。妙案が浮かぶのは、そこからです。

6 ご近所の「近助」はチカラになる

【ご近所のありがたさ】

熊本地震を経験して、はじめて近所のありがたみを知ったというかたがいました。普段、自宅と施設が生活のすべてになっていると、近所の良さが見えてきません。地域の催しに顔を出してみましょう。

地震直後、行政に連絡しても、つながらなかった、つながっても、「状況を報告してください」と逆質問に合うばかりで、何も役に立たなかったという声があります。やはり公助には、限界があります。

一方で、「頼れるのは、友人・知人だけ」という声もあります。確かに、現実はその通りでした。しかし、物理的にいちばん近くにいる人が、最初の救助者・支援者になることも少なくありません。近隣に仲間がいたら、普段も安心ですよ。

7 「疎開」の“きがる一ちゃん”

余震が続き物資も不足する被災地の中で「避難」生活を送るよりも、少し遠くに「疎開」（広域避難）してみる手はあるか、みなさんに尋ねました。その結果、「理念は賛成、実際は無理」という回答が多くを占めました。

慣れない場所に移動するよりも、自宅付近のほうがよくばど楽だという声。では、少し遠くに慣れた場所があったらどうでしょう？ 熊本地震の際にも、福岡のホテルや旅館に疎開して、親子で「レスパイト（休息）」することができた人もいました。

【きがる一ちゃん】

遠足で、少し離れた宿泊施設に通い慣れていたら、そこに「避難・疎開」してみたくありませんか。他府県にある育成会同士の交流事業などでも、宿泊体験を気軽にルーチン化（習慣づけ＝“きがる一ちゃん”）してはいかがでしょうか。

8 ひとつずつ、着実に

【何もしなければ、防災力は高まらない。でも、ひとつやれば、ひとつ強くなれる】

家庭の事情は様々です。障害の程度も様々です。一律にマニュアルどおりに防災対策ができるわけではありません。結局、共通して言えることは、本当に「当たり前のこと」になってしまいます。でも、この「当たり前のこと」をしたかしかかったが、災害のときに試されるのです。社会のほうが変わるべき事柄がたくさん含まれているけれども、そのこともしっかり見据えて、みなさんと手をつないで、いっしょに「できること」を探していきませんか。